富山県
砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡
緊急発掘調査概要

1978年3月

富山県教育委員会

発刊にあたって

砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査は、昭和52年度の国庫補助金の交付を受けて実施し、多大な成果をおさめて終了しました。

今回の調査では、特に奈良～平安時代の遺物・遺構等が発見されました。

この調査の完了にあたり、地元梅檀野地区の方々をはじめ、関係各位の協力と指導を受けました。感謝いたします。

なお、今回、地元の御理解で遺跡の大半が保存されました。本書が、この遺跡に対する理解と保護の一助となれば幸いです。

昭和53年３月

富山県教育委員会

目　次

発刊にあたって
例　言
Ⅰ　地形と周辺の遺跡……1
Ⅱ　調査に至るまで……1
第１図　地形と周辺の遺跡……1
Ⅲ　調査の概要……2
1　調査の経過と層位……2
第２図　地形図・グリッド配置図……2
2　遺構……3
第３図　遺構実測・配置図……4
3　遺物……5
第４図　土器・石器実測・拓影図……6
第５図　土器実測・拓影図……9
Ⅳ　まとめ……10
参考文献……10
図版

例　言

1　本書は、昭和51年５月20日・６月25日～７月３日まで行なった試掘調査と昭和52年10月６日～10月20日まで行なった本調査の結果を合せた、富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡の発掘調査概要である。

2　調査は、富山県教育委員会が主催し、文化庁記念物課の指導と砺波市教育委員会・梅檀野土地改良区の協力を得て実施された。

3　調査参加者は、次のとおりである。

富山県教育委員会文化課（兼）富山県埋蔵文化財センター神保孝造・岡上進一・橋本正春（以上調査担当者）、砺波市教育委員会老松邦雄、地元福島秀賢・中村金造田上道子・島田文・森輝子・川岸静江・黒田和子・中川千鶴子・林光子・斉藤重子・斉藤信子・斉藤かをり斉藤寿美子・山本タメ・山本園枝・荒井ソトエ・田上恵美子・掘田はり・田中よしい・小島花子・宮野芳子信田つえ・若森すみを・遠田ソトエ。

事務局は、文化課・埋蔵文化財センターに置き、課員（所員）の協力を得て、主任川口稔が庶務に当たり、文化財保護主事岸本雅敏・上野章が渉外を担当し、課長（所長）岩林昭・課長代理（所長代理）清水常信が総括した。

4　調査期間中、文化庁記念物課稲田孝司氏の指導を得た。また、調査の実施から調査後の概要作成まで一貫して埋蔵文化財センター橋本正・岸本雅敏氏の助言・指導を得た。

5　今回の整理・編集・執筆は、神保・岡上・橋本が分担して行ない、各々の文責は、文末に記した。

I　地形と周辺の遺跡

宮森新北島１遺跡は、富山県砺波市宮森新字北島地内に所在する。

富山県の西南、砺波市内より東方向約６㎞、庄川の右岸に芹谷野段丘がある。遺跡は、その段丘の西側縁辺部に位置し、標高は79～80ｍを測る。その段丘は、幅0.5～1㎞・長さ10㎞で、庄川とは30ｍの比高差を測る起隆扇状地である。この段丘の東側は、和田川の河岸段丘面をもち、その川の背後には、低い山々が連なっている。

遺跡の西側は、急峻な崖で、北側は傾斜をつよめる。東側は、庄川へ降りて行く道路によって切られている。南側は、深い谷が入り込んでいる。この遺跡をとりまく地形は、東西に張り出した小丘陵であることが判り、遺跡の範囲も東側の道路以東に拡がる可能性があると考えられる。

この芹谷野段丘や和田川の河岸段丘上には、最近の調査により、先土器時代から中・近世の遺跡が数多く点在していることがわかった。

特に縄文時代・奈良～平安時代・鎌倉～室町時代の遺跡が集中してみられる。

縄文時代には、本遺跡と谷一つへだてて厳照寺遺跡〔神保他1977〕・上和田遺跡などがある。奈良～平安時代には、高沢島Ⅲ遺跡・増山窯跡などがある。増山遺跡・増山城跡は鎌倉～室町時代の遺跡である。

（岡上）

II　調査に至るまで

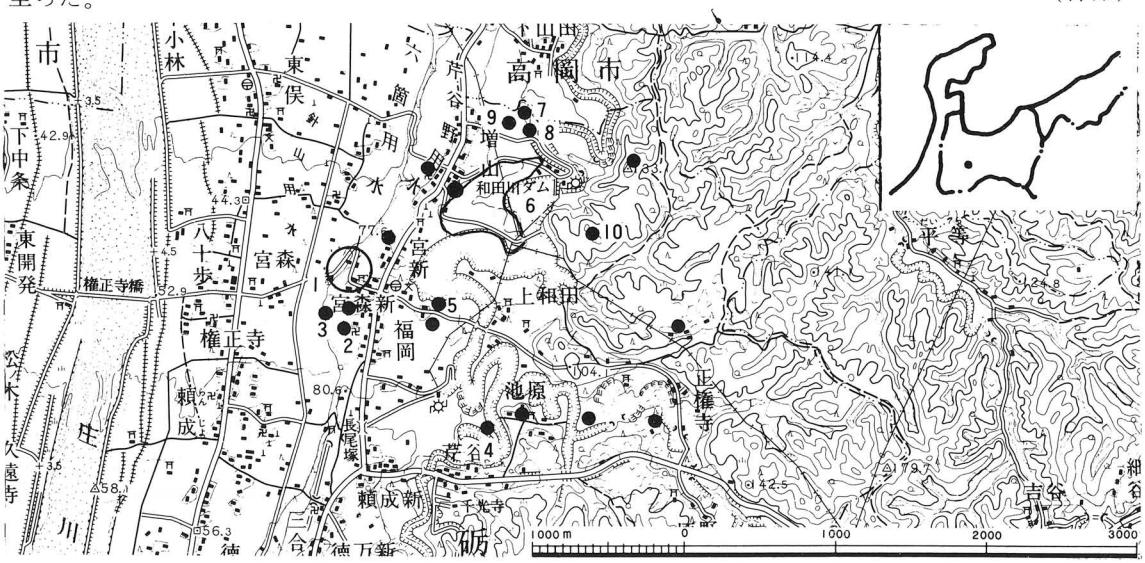
砺波市栴檀野地内は、古来から自然環境に恵まれ、厳照寺遺跡をはじめ数々の遺跡が知られている。くわえて、未発見の遺跡数も多い地域と予想されてきた。

昭和50年、この栴檀地内で５ヶ年にわたる団体営ほ場整備事業が砺波農地林務事務所指導のもと、地元土地改良区の手で計画された。この事業計画・実施内容の連絡を受けた富山県教育委員会と砺波市教育委員会は、これに対処するため早急、各関係機関との協議を行った。そして、当該年度の工事実施に当っては工区内を対象とし事前の遺跡分布・試掘調査を行う事。その結果によって遺跡の保存措置を講ずる事などを申し合せた。

宮森新北島Ⅰ遺跡は、こうした経緯のなか昭和51年５月県教育委員会が行った分布調査によって発見された新遺跡である。遺跡は、その後、市教育委員会が県教育委員会の指導で試掘調査（昭和51年５月20日）を行い、遺跡の状況・範囲を掌握した。またその結果にもとずき再度各関係機関との協議を行って、遺跡の大半を工事の設計変更によって水田下に保存された。しかし、一部変更困難な二地点(約470㎡)が生じたため二地点については第２次試掘調査を実施し、以後の措置を講ずることで合意した。

第２次試掘調査は、昭和51年６月25日から７月３日にわたって県の指導のもと市教育委員会が行った。調査は、遺構の有無確認を主目的とし、二地点各々に１ｍ幅のトレンチを設け、約 134 ㎡の発掘調査を行った。トレンチの方向・遺物取り上は、事前に台地全体へグリッドを設け、それに従った。その結果、各地点から多数の遺物が出土し、それと共に縄文時代中期の住居跡や穴、奈良～平安時代の穴など遺構を検出した。このため再び協議が持たれ、遺跡一帯を昭和51年度の工事施工区から除外し、第１地点は水田下に保存。遺構密度の軽減な第２地点は、記録保存を行うこととし、年度を改めて今回の本調査に至った。

（神保）



第１図　地形と周辺の遺跡(1/50,000)　1.宮森新北島Ⅰ　2.厳照寺　3.宮森新大谷島　4.芹谷北秘念寺　5.上和田　6.増山　7.高沢島Ⅰ　8.高沢島Ⅱ　9.高沢島Ⅲ　10.増山城跡

III　調査の概要

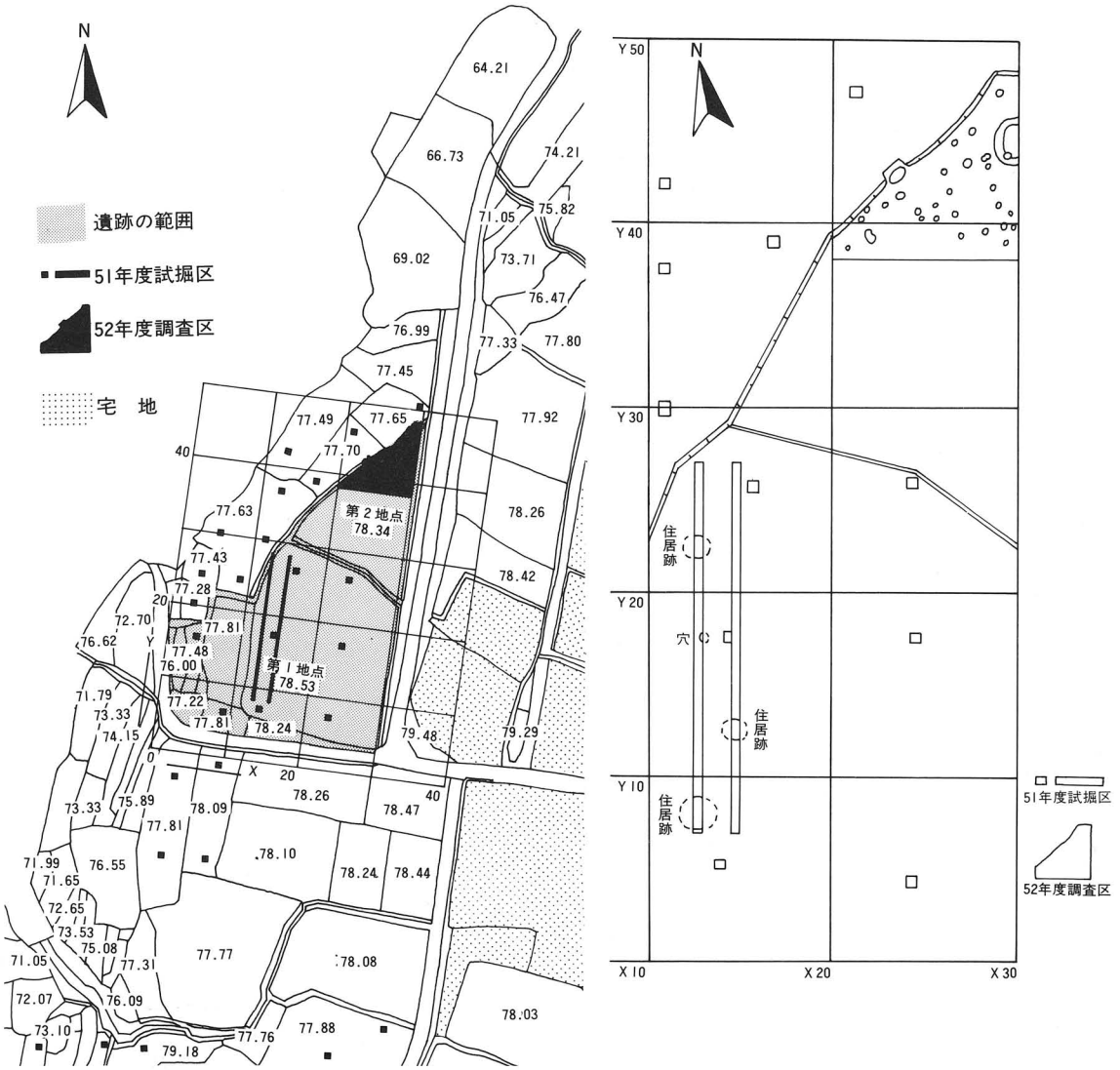
1　調査の経過と層位

本遺跡は、昭和51年５月に、ほ場整備事業に先立つ遺跡分布調査が行なわれたときに発見された。そこで、二度に渡る調査がなされ、縄文時代・平安時代に属する遺跡であることが確認された。また、遺構として、縄文時代中期に属する住居跡１・穴１・ドーナッツ状遺構１と奈良から平安時代に属する穴などが発見された。この他に、段丘上では、水田耕作のための整地や削平が行なわれているが、遺物包含層が残っていることがわかった。

以上の調査結果をもとに、地元の方々等と遺跡の保存のための協議を行った。しかし、第２地点は、保存措置を講じることができないため、昭和52年10月６日から10月20日まで調査を行なうこととなった。

発掘区は、２ｍ×２ｍのグリッドを基本として、第２次調査のときに組まれており、Ｘ軸を東西に80ｍ・Ｙ軸を南北に 100 ｍ設定した。今回の調査では、４ｍ×４ｍの発掘区を用い、土層観察用のあぜを残しながら表土を除去していった。

第３層黒色土上面で、平安時代などに属する遺構の検出を行ったが、確認できなかったため掘り進んだ。第３層中位には、明赤褐色の焼土状の粒子（径２～３mm）が２cmの厚さでほぼ水平に堆積していたところがあったためここでも遺構の検出を行なったが、確認はできなかった。第５層上面では、直径10～30cm前後の柱穴状遺構群・柱穴群・ドーナッツ状遺構などが、調査区全体にみられた。Ｘ23～24Ｙ42～43区では、穴が半分だけ検出されたため、拡張して全体を出した。



第２図　地形図・グリッド配置図　（左・地形図及び区割図, 1/2000　右・遺構概略配置図, 1/400）

掘立柱建物01は、調査区西側で検出されたが、柱痕はなかった。柱穴状遺構は、調査区全体に密に分布していた。ドーナッツ状遺構は、調査区北側に半分だけみられた。調査区の東には、段丘下の水田へ続く道路が、段丘を断ち切るように走っているため、調査区を東側へ拡張することはできなかった。

段丘上の層位は、第1層耕作土（70cm）・第2層床土（10cm）・第3層黒色土（30cm）・第4層黄褐色土で第5層への漸移層（5cm）・第5層黄色粘土層である。段丘上は、ほぼ水平であるため、極端な傾斜は持っていない。第3層中位には、明赤褐色の焼土状の粒子を含む層があり、第3層は3枚の文化層に分けられるのかも知れないが、今回の調査では行なわなかった。

遺物は、第1～4層までと遺構の一部より出土した。遺物の出土状態は、調査区の南側（段丘の中央部側）に行くほど多くなった。須恵器は、調査区の東側に多くみられ、土師器は南西側に多かった。

あぜは、土層図の作製・写真撮影後に取り去っていった。その後、遺構の平面図の作製・写真撮影を行って終了した。

遺跡の大部分は、水田の下に保存されることとなった。（橋本）

2 遺　構

前回の調査では、縄文時代中期に属する住居跡1・穴2個と奈良から平安時代に属する穴などが検出されている。しかし、試掘調査であるため、局部的な発掘となり、しかも遺構検出面で調査をとめているので、詳細な検討は難しい。

今回の調査では、掘立柱建物1棟・穴4個が検出されたが、縄文時代に属する遺構はみられなかった。

掘立柱建物01（第3図・図版第1の4）

今回の調査区の東側で建物1棟が検出された。柱間は、2間×3間で6.4m×4.8mある。南北桁行の1間は3.1mで、東西梁行の1間は2.4mとなっている。主軸は、真北となるが、やや西よりとなる。柱の痕跡（図版第1の9・10）は、5個の柱穴でみられたが、柱根は検出できなかった。柱穴の平面形には、隅円方形と不整円形のものがみられ、前者のなかに円形の柱の痕跡がみられた。柱の痕跡は、円形の黒色土となっており、掘り方部分の黒褐色土（黄色粘土粒子を含む）・黄褐色土とは、容易に識別できた。また、柱部分は、ほぼ垂直に柱穴底面まで達しており、遺構検出面より21～34cmを測る。柱の直径は、約15cm位である。掘り方の規模は、20×30cmのものが多く、断面形は円柱状で平底となっている。

本建物は、倉庫的な性格を持つと思われる。

穴01

平面形は、円形を呈し、70cm×60cmの大きさで、断面は円柱状で底面は丸味を持つ。覆土は、黒褐色土・黄褐色土を主体とし、順序よく堆積している。底面より少し上位に、35×25×16cmの川原石が水平にあった。

穴02

長楕円形の平面形で、断面は半球形を呈する。覆土は、黒褐色土を主体とし、順序よく堆積していた。

穴03

ドーナッツ状遺構である。中央部には、黄色粘土層があり、その周囲にドーナッツ状の黒色土・褐色土及びそれらの混土層が入る。全体を検出しなかったが、長径約5mの円形をなすと思われる。断面は、半球形に近いが、中央部は円錐状に深くなり、遺構検出面より110cmを測る。穴の南西隅には、穴04が存在する。

穴04

平面形は、円形で、断面は円柱状となり、大きさは、直径70cm、深さ29cmを測る。

柱穴群

第5層上面には、直径5～30cmの柱穴状遺構が多数存在した。これら全部が、建物に伴う柱穴あるいは穴とは考えられず、柵・杭・補助穴・地面の窪みが混在していると考えられる。調査区内での分布状況は、全体にくまなく存在しており、西側の一部では、穴がつながっているため柵状にみえる所がある。

覆土の色調には、黒色・黒褐色・黄褐色・茶褐色のものがみられた。平面形には、長方形・円形・不定形のものがある。断面形では、円柱形・円錐形・皿形・円柱形で二段掘となっているものがある。以上のように、大まかな特徴をあげられるが、それらの諸特徴が複雑に組みあわさって存在しているため、分類は難かしい。

その中で、黒色土で円形の平面形をもつものが多くみられた。深さでは、15～25cmのものが多い。

まとめ

今回の調査では、奈良時代に属する掘立柱建物1棟を検出した。その他に、前回の調査で穴などを確認している。これらの掘立柱建物は、遺跡の一部分を調査した結果発見されたものであるため、これをもって遺跡全体の遺構を代表しているとは言えない。

掘立柱建物01の特徴をまとめると、以下のようになる。柱間は2×3間で、1間は10尺となる。柱根は、なかったが、直径15cm前後の柱の痕跡がみられた。柱穴内からの遺物の出土はなかった。これらの

他の遺構として、柱穴群が掘立柱建物01の内外にみられた。未発掘部分に、掘立柱建物・穴・柱穴群の存在が推測される。

掘立柱建物01と同様の建物は、県内では井波町高瀬遺跡〔阿部1974〕・入善町じょうべのま遺跡〔高島・橋本1974〕の倉庫風掘立柱建物があげられる。本掘立柱建物01も、倉庫的性格を有すると思われる。この掘立柱建物の柱穴の規模は、貧弱なものと言え、地方豪族や役人などの生活した家などとは考えられず、むしろ、一般の人々に関係する村落の一部と考えられる。

掘立柱建物と柱穴群の在り方としては、郡衙・庄家などでは掘立柱建物と柱穴群が重複しないものが多い。しかし、本遺跡では、掘立柱建物と柱穴群は重複してみられる。これは、時期が異なるが、魚津市早月上野遺跡〔岸本・山本・酒井1976〕の第２次調査区の様相と似ている。

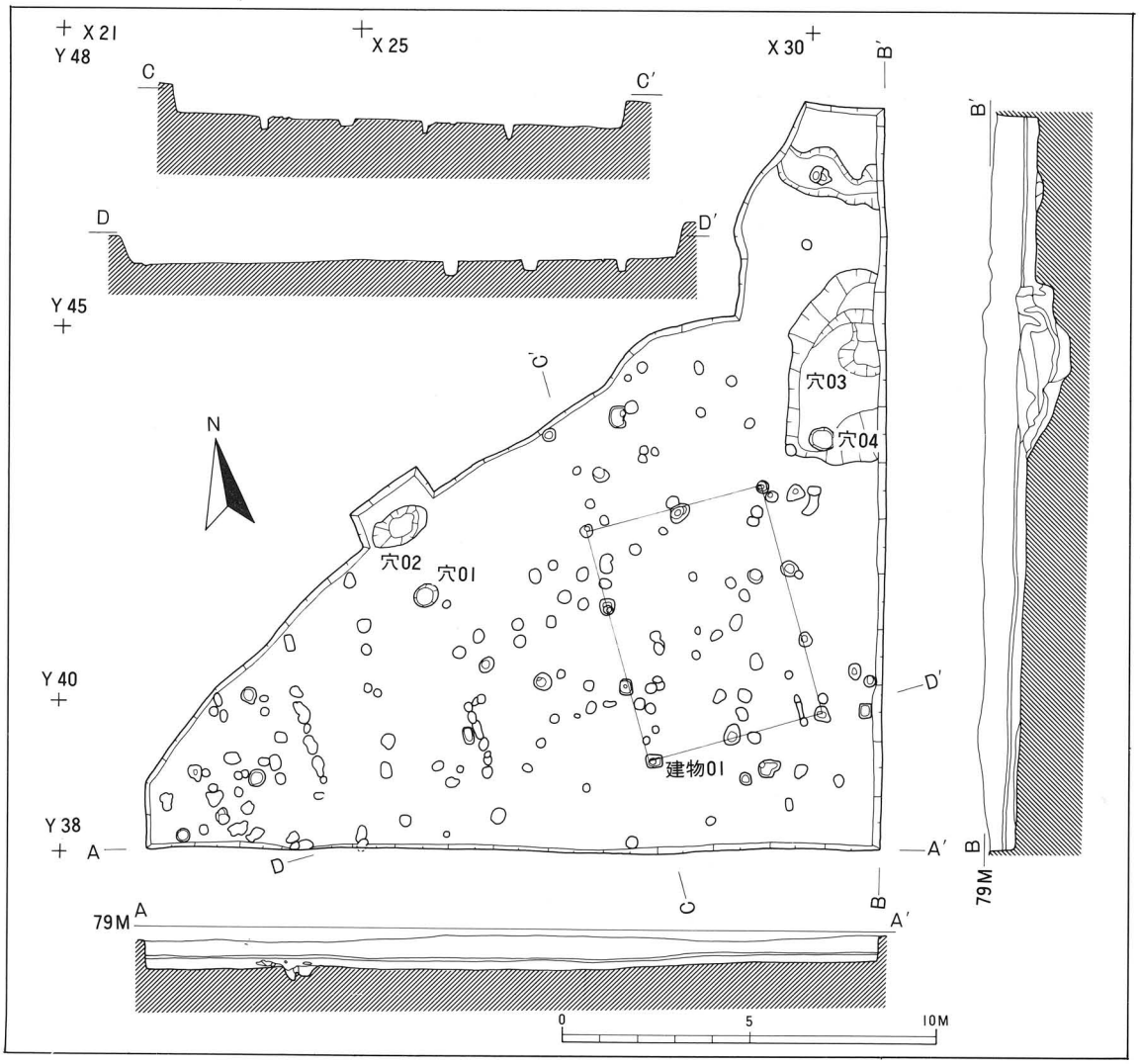
本遺跡の掘立柱建物01・柱穴群の年代は、一部の穴より遺物が出土しているため、それらの遺物をもって位置づけられ、奈良時代後半に位置づけられよう。

以上の点より、掘立柱建物は、奈良時代に属する村落の一部と考えられ、未発掘部分にも一般の住宅・倉庫が幾棟も建ちならんでいたと考えられる。

なお、本遺跡の周囲には、同時期に属する掘立柱建物などが確認されており[註①]、本遺跡との関連が考えられる。

（橋本）

註① 本遺跡の周辺では、高沢島Ⅱ・高沢島Ⅲ遺跡など〔神保・久々1978〕の調査により、奈良時代や平安時代の遺構・遺物が検出されている。



第３図　遺構実測・配置図　（1/200）

3　遺　　物

縄文時代の遺物

昭和51・52年の試掘・本調査箇所から若干の土器・石器が出土している。大半が黒色の遺物包含層出土で、昭和51年度の試掘地点（第１地点）に多く認められた。

土器

宮森新北島Ⅰ遺跡出土の土器は、縄文時代前期後葉・同中期前葉・同晩期中葉の大旨三期に区分できる。土器はいずれも細片で風化が著しく、文様の明瞭なものはわずかで今回図示しえた資料だけにすぎない。

縄文時代前期後葉の土器（第４図１・図版第２）

縄文地へ細かい浮隆爪型文を施す深鉢形土器の口縁部が1片認められる。器厚は、薄く胎土・焼成が窮めて良好な土器であり、縄文時代前期後葉に位置づけられる福浦上層式土器に比定されよう。

縄文時代中期前葉の土器（第４図２～19・図版第２）

本遺跡の主体をなす土器群であり、出土量も大半を占る。土器はいずれも深鉢形土器の破片である。

器形は、円筒形の胴部にキャリパー状の口縁部がつき、頸部が特徴的で外反・屈曲するもの（３～７13・14）が主であり、頸部でやや外反した口縁部がつくもの（８・９）も若干認められる。文様は、口縁部に数条の半截竹管文を横走させ、周囲４ヵ所で縦位の隆帯や突起で区画する。その間を無文帯としたり、三角形の抉り込みを施し、間に格子目状の沈線を引き蓮華文風にするもの（３・９・10・14）や前段階の土器形式である新保式土器の系列を引く口縁部文様帯を施すもの（４・６・14・15）がある。また、胴部片には、半截竹管で引くＢ字状文に格子状沈線や斜縄文を組ませたもの（16～18）、新保式土器の系列を引く文様で半截竹管で描く直線や曲線を組合せたもの（10・11・19）、木目状・縦位の羽状縄文を施すもの（12）が出土している。その他、器面全体へ斜縄文・羽状縄文を転す土器（５）も多い。

以上、これらの土器群に類似する資料としては、当遺跡から南へ約 200 mに位置する厳照寺遺跡出土の土器〔神保他1977〕・城端町西山Ｂ遺跡出土の土器〔上野他1976〕といった一群の資料があげられる。これらは、従来の土器編年に従えば縄文時代中期前葉に位置づけられる新崎式土器として、とりあつかわれてきたものである。しかし、近年、新崎式を再検討する動き〔小島1974〕と伴に、神保は広義の新崎式土器において土器の製作第２・第３段階〔橋本1968〕の技術的差異を認め、それを時期差としてとらえている〔神保他1977〕[註①]。この考え方にもとづけば、本遺跡出土の土器は、広義の新崎式土器でも古手に対比し、厳照寺第Ⅰ期の土器群（厳照寺Ⅰ式と仮称した）と類似するもので、同時期の内容を補う好資料といえよう。

縄文時代晩期中葉の土器（第４図20・21、図版第２）

口縁部がくの字形に外反する鉢形土器の口縁部片と、胴部片がある。いずれも薄手の作りで器面へＬＲの細かい縄文を施す。20は、口唇部にサンゴ状装飾風の文様が認められる。20・21とも縄文時代晩期中葉の中屋式土器に属する。（神保）

註①　この点の基本的考え方については、橋本正氏の教示を得て先に論述している〔神保他1977〕。このため、本書では具体的には触れないが、前書では、広義の新崎土器を細分し、それぞれ厳照寺Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式として仮称している。しかしその後、小島俊彰氏がその仮称名について意義をとなえられている〔小島1978〕。

石器（第４図の22～28）

昨年の試掘調査及び今年度の本調査で出土した石器は、打製石斧１点・擦石９点・石核２点・その他の石器２点・剥片類11点である。

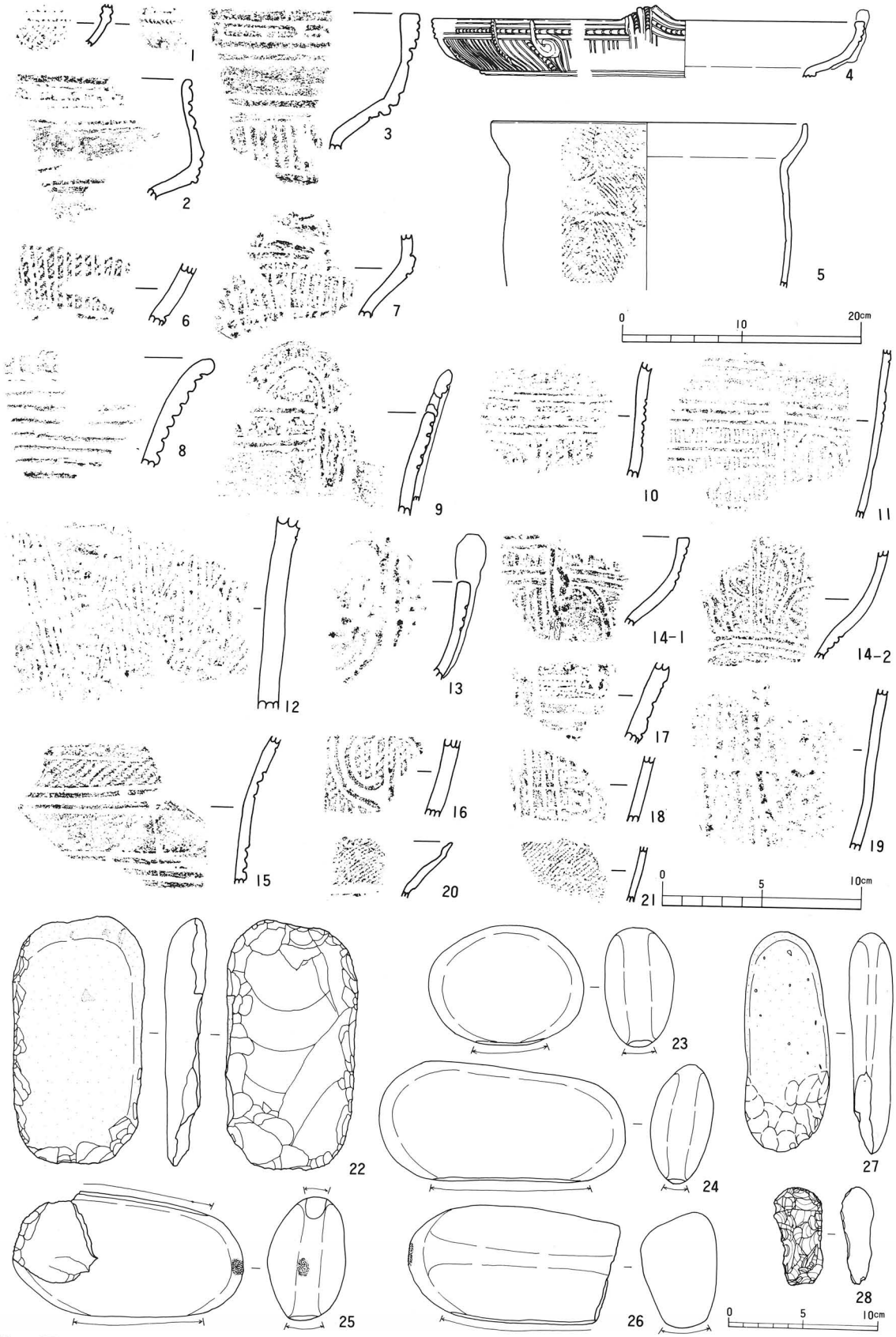
本遺跡の調査地点で出土した石器には、厳照寺遺跡のそれと比べると、①器種が少なく②擦石が多く③磨製石斧・石皿・石錘などがないことが特色である。

打製石斧（22）形状は、両側面がまっすぐな短冊型のもので、　方に自然面を残す。石質は、砂岩質のものである。

擦石（23～26）形状には、断面が楕円形で、平面が円形のもので一面に擦り面をもつもの（23）と平面が細長い形のもので、一面に擦り面をもつもの（24）及び上下２面に擦り面をもつもの（25）断面が台形に近く一面に擦り面をもつもの（26）がある。25・26は、敲打痕があり、25は、両端からのそれが見られる。石質は、砂岩質・安山岩質である。

その他の石器（27・28）27は、砂岩質で、一種の敲石として利用されたものと考えられる。28は、自然面を残す鉄石英製で、石器製作途上のものか。

その他、鉄石英や粘板岩質の石核と黒曜石や鉄石英の剥片がある。（岡上）



第4図　土器・石器実測・拓影図　（1～3・6～21，⅓　4・5，⅕　22～28，¼）

奈良・平安時代の遺物

須恵器・土師器（第５図）

本調査及び前回の調査では、奈良時代に属する須恵器・土師器が出土し、前者の出土量が少し多く、第１～４層より出土したものが多かった。

今回の調査は、遺跡内の一部分だけの発掘であった点と、遺物包含層中での適切な土器区分ができなかったため、一括品として扱った。しかし、時期の異なるものがあり、後で区別する。

須恵器

須恵器は、蓋・坏・壺・甕の器種があり、遺物出土量は遺物整理箱で３箱程度であった。須恵器の色調・焼成では、ａ青灰色で硬いもの、ｂ灰白色で軟いものに分けられる。

蓋（１～５）

蓋は、法量などによりＡ～Ｃの３種に分けられる。色調などでは、１・３・４はｂ類に属する。

蓋Ａ（１・２）１・２の天井部は丸味をもち、擬宝珠状のつまみを有する。１には、つまみの痕跡がみられる。天井部から口縁端部にかけて、段を有する。口縁端部は、丸くおわる。渦状文がみられるが、ナデにより 消されている。

蓋Ｂ（３～５）口径は、15～17cmを測る大形品となる。３の天井部は平担となるが、渦状文がみられる。天井部から口縁部にかけて明瞭な段をもつ。３・４の天井部は高くなる。４の口縁端部は、接地面が平たくなり、断面が三角形を呈する。５の口縁端部は、１・２と同じく丸くおわるが、はね上るように外方へ開く形をとる。

蓋Ｃ　小破片であるため図示はできなかったが、ｂ類に属する軟い土器で、口縁端部の屈曲は鋭く、細くたつ。

坏（６～13）

坏は、高台がつくものとつかないものとの両方があり、Ａ～Ｃの３種に分けられる。色調などでは、10がｂ類に属する。

坏Ａ（６～９）６～９は、高台のつく坏で、６はやや小さいが、他はほぼ同じ法量をもつ。高台は貼りつけられ、下方にふんばる形となる成形方法では、高台部分・底部・体部が別々に作られるものもある。内外面ともに、横ナデを行なうものが多く、成形痕を消している。９の体部外面には、ヘラ削りによる面がみられるが、その上をナデている。

坏Ｂ（13）底部破片であるが、底部外面には、糸切り痕が残っている。高台は、下方に細く長く伸びる。内外面ともに横ナデがみられる。

坏Ｃ（10～12）10・11の器形・法量は、ほぼ同じである。丸味を持つ底部から外方へ一直線に開き、口縁端部は丸くおわる。11の口縁端部は、外反し、先細りとなりおわる。12は、底部のみであるが、底径が若干大きい。また、平底である。11の底部外面には、ヘラを止めたためにできた粘土の移動と粘土の盛り上りがみられる。

壺（14・16）14は、胴部から口頸部に至る破片であり、胴部上位にヘラ状工具の先端を用いて２条の沈線をめぐらしている。16は、胴部破片である。この他にも数片の破片があるが、図化はできなかった。内外面ともに横ナデがなされる。16の胴部内面では、不規則なナデがみられた。色調等は、ａ類に属する。

甕（15・17～19）胴部と底部の破片のみである。15は、底部の破片で、内面には、規則正しく約1.5cmの幅の横ナデがみられる。胴部内外面には、叩文がみられる。外面には、格子、平行・斜行の叩文が内面には、同心円の叩文がみられる。色調等はａ類に属し、焼成等は壺と伴に精良な部類に入る。

土師器

土師器には、黒色土器・坏・甕・鍋がある。遺物量は、遺物整理箱２箱程度である。色調は、明褐色を基調とする。

黒色土器（20）20は、内面が黒色となる土器であり、完形品は出土していない。他に細片で２片出土している。この３片は、いづれも坏の口縁部・底部であり、同じ器形と考えられる。20の口縁端部は、内面がヘラにより削られているため、先細りしておわる。内外面ともにヘラ磨きがなされている。外面に煤がつく例がある。

坏（21・22）21は、坏底部破片であるが、内面に暗文状のヘラ磨き痕がみられる。一度内面全体をヘラ磨きした後、底部中央より放射状にヘラ磨きするが、一部交叉し、格子状にみえるところもある。22は、底部外面に糸切り痕がみられ、胴部外面には、ヘラ削り痕もみられる。この他に、細片で、糸切り痕をもつものともたないものがある。

甕（23～27・29）甕は、法量によりＡ～Ｃの３種に分けられる。

甕Ａ（24）口径９cmと一番小さい。口縁部は、頸部より外傾した後、「く」の字状に内側へ直立する。口縁端部は、ヘラにより平担におわる。胴部内外面ともに、横ナデがみられる。また、煤も内外面にみられ、特に口縁部内側に厚く附着している。

甕Ｂ（23・25・26）口径は、12～16cmを測る中型のものである。口縁部などのつくり・特徴は甕Ａとほ

ぼ同じである。23の口縁部外面には一条の沈線が入る。26は、糸切り底の破片である。胴は長胴となり、23・25につくと思われる。

甕C（27・29）口径は、21～23cmを測り、大型品である。口縁部は、頸部より「く」の字状に外反し、口縁端部は、唇厚し、沈線が一条入る。胴部上半から口縁部には、横ナデが施され、胴部下半には、平行叩目文がみられる。底部は、丸底で平行叩文が交叉する。胴部内面下半には、指によるナデがみられ胴部内面上部から口縁部にかけては、横ナデがみられる。

鍋（28）本遺跡からは、1点出土している。外面の風化が著じるしく、成形痕はかろうじてよみとれる。口縁端部は、ヘラにより角をつけておとされる。頸部には、2条の沈線がみられる。胴部外面は、ヘラ削りによる面がわずかによみとれる。ヘラ削りの方向は、砂粒の移動より、左上から右下りの斜方向になっている。内面は、横ナデがていねいになされ、風化度は少ない。胴部から底部にかけては、カキ目と思われる条線がみられ、これも右下りと思われる。内面にも煤がみられる。

ま と め

北陸地方における須恵器の編年は、吉岡康暢氏による編年〔吉岡1967〕があり、現在に至っている。一方、本県での須恵器の編年は、最近の井波町高瀬遺跡〔阿部・舟崎1972〕・入善町じょうべのま遺跡、〔高島他1972〕の調査により資料が増加した。体系的な編年は、舟崎久雄氏の編年〔舟崎1974〕・藤田富士夫氏の編年〔藤田1974〕があいついでなされた。ここでは、県内の調査例・資料を参考として、本遺跡の時期を考えてみたい。

須恵器の蓋には、糸切り手法がみられない。蓋Aの天井部は、丸味をもち渦状文をナデにより消している。つまみは、出土していないが頂部に痕跡が残されており、おそらく擬宝珠形のつまみがつくと思われる。天井部から口縁端部にかけては、段を有する。口縁端部は、丸味を持つが屈曲して下方に向う。蓋Cの口縁端部は、細く強い屈曲をもって下方に向う。

須恵器坏は、糸切り手法が用いられている13がある。13は、底部破片であり、口縁部等の形態は不明であるが、底部は平になる。坏A・Bの口縁部は、底部からまっすぐに外方へ伸び、口縁端部は丸味をもつ。坏Aの口縁部の外傾度[註①]は、約70°・坏Bの外傾度は55°～60°となる。

黒色土器20は、口縁部破片であるが、他に底部破片が2点出土しており、器形が推測される。平たい底部より、弧を描いて立ち上り、それからまっすぐ上方に向う。口縁端部は、内側の面をとっため細くなりおわる。

土師器坏は、平らな底部の例が多い。また、糸切り手法のものが、22の他に2例みられる。いづれも破片であるため、全器形は不明であるが、須恵器坏と異なり、外方へ大きく開く形をとる。

土師器甕は、「く」の字状の頸部より、先細りぎみになる口縁端部が、やや内傾ぎみに立ち上る。大形の甕の口縁部は、「く」の字状の頸部より外方に向って伸び、口唇部はぶあつくなる。口唇部には、一条の沈線を持つ。胴部は、肩が張らず長胴となる。小形の甕の底部は平底となり、26は糸切り底である。

鍋は、頸部の掘曲度が小さく、口縁端部は角をつけて斜めにおとされる。

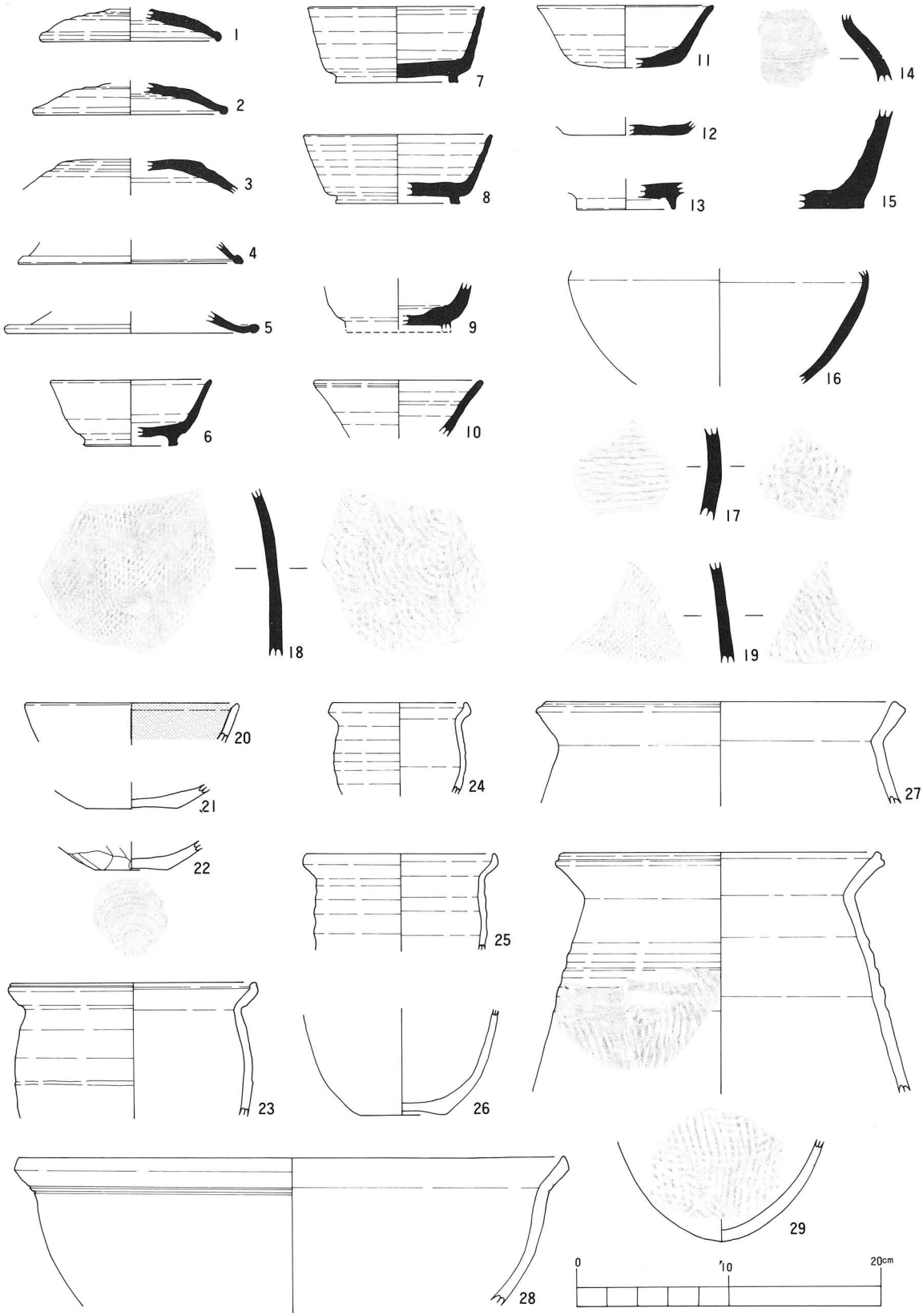
以上、本遺跡の遺物の特徴をまとめてみた結果、糸切り手法を持つものとそうでないものとの二大別できる。糸切り手法のみられないものは、須恵器蓋・坏・壺・甕と鍋である。一方、糸切り手法のみられるものは、須恵器坏Cと土師器坏・甕26である。前者は、「加賀三浦遺跡」の編年の「三浦中層」に位置づけられる。藤田氏の編年〔藤田1974〕では八世紀末葉の土器群に類似し、岸本氏の編年〔橋本・岸本1975〕では、A期の土器群に対比できる。後者は、糸切り手法がみられる点と器形などの特徴などより、「三浦中層」と「三浦上層」との中間に位置する。岸本氏の編年〔岸本1975〕では、B・C期（九世期中葉）に類似する。しかし、須恵器壺16・土師器甕Bは、井波町高瀬遺跡〔舟崎1974〕に類例が求められ、若干新しい様相もみられる。

時期を比定してみると、奈良時代末葉と平安時代中葉の二時期に分けられる。遺物の出土量・出土地点より、前者が主体をなす。（橋本）

註① 口縁部の外傾度の計測方法については、石川県浅川第1号窯跡〔宮本1976〕の計測方法に従った。

中世以降の土器（図版第3の2）

本遺跡からは、古代から現代に至るまでの遺物が出土している。それらを例記すれば、以下のようになる。珠洲焼破片・越前焼破片・染め付け焼破片・磁器などがある。これらは、調査区全体に散漫な状態で分布し、第1層より出土した。時期は、鎌倉・室町・江戸時代と現代のものである。（橋本）



第5図　土器実測・拓影図　(1/4)

Ⅳ　まとめ

ここでは、前章まで述べたことを総括しまとめとしたい。

1　本遺跡は、庄川の右岸で、南北に細長く伸びる芹谷野段丘上に位置する。また、本段丘の東には、和田川の河岸段丘がある。芹谷野段丘と和田川の河岸段丘上には、縄文時代・奈良～平安時代・鎌倉～室町時代の遺跡が多くみられる。

2　縄文時代の遺物としては、前期後葉・中期前葉・晩期中葉の土器と石器がみられる。土器では、中期前葉の土器が多くみられ、この土器群は、本遺跡の南に位置する厳照寺遺跡の中で「厳照寺Ⅰ式」〔神保他1977〕と呼ばれる資料に類似する。また、「厳照寺Ⅰ式」に比定される資料が多く、内容が豊富であった。石器では、擦石が多くみられ、石皿・石錘・磨製石斧は出土しなかった。

3　縄文時代の遺構としては、前回の調査時に縄文時代中期に属する住居跡１軒・穴などが確認された。

4　奈良時代の遺構では、掘立柱建物１棟が検出されている。柱間は、２×３間で１間が10尺となる。年代は、共伴する遺物などより、奈良時代末葉と考えられ、倉庫風な性格を持つ。また、柱穴群が重複してみられ、類例は時期が異なるが魚津市早月上野遺跡〔岸本他1976〕第２次調査区に求められる。

5　須恵器・土師器は、奈良時代末葉と平安時代中葉に比定される。前者には、須恵器が多く、蓋・坏・鍋などの器種が後者には土師器が多く、須恵器坏Ｃ・土師器坏・甕などの器種でみられた。また後者では、糸切り手法を伴う。土器量では、須恵器の方が若干多い。

6　本遺跡で注目されるのは、奈良時代末葉に属する掘立柱建物１棟と伴なう土器である。この時期の建物としては、入善町じょうべのま遺跡〔橋本・岸本1975〕など数少ない。本遺跡の成果が、奈良時代から平安時代にかけての文化内容及び生活を解明するための手がかりとなれば幸いである。

本遺跡の調査は、一部地区の部分的発掘であるため、遺構・遺物の時期比定を急ぎすぎたかも知れない。あらかじめ御了承いただき、先学諸兄の御教示・批評などを受けたい。

参考文献

ア　阿部義平・舟崎久雄1972『富山県井波町高瀬遺跡発掘調査概報　昭和46年・春』富山県教育委員会
阿部義平1974「井波町高瀬遺跡　第Ⅱ章遺構」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』

ウ　上野章・酒井重洋・神保孝造1976『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第四次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

キ　岸本雅敏1975「Ⅲ遺物１須恵器と土師器」『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』富山県教育委員会
岸本雅敏・山本正敏・酒井重洋1976『富山県魚津市早月上野遺跡第２次調査概報』富山県教育委員会

コ　小島俊彰1978「富山県の考古学動向」越中史壇第68号

シ　神保孝造・岡上進一・松本幸治1977『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
神保孝造・久々忠義編1978『富山県砺波市栴檀野遺跡群予備調査概要』砺波市教育委員会

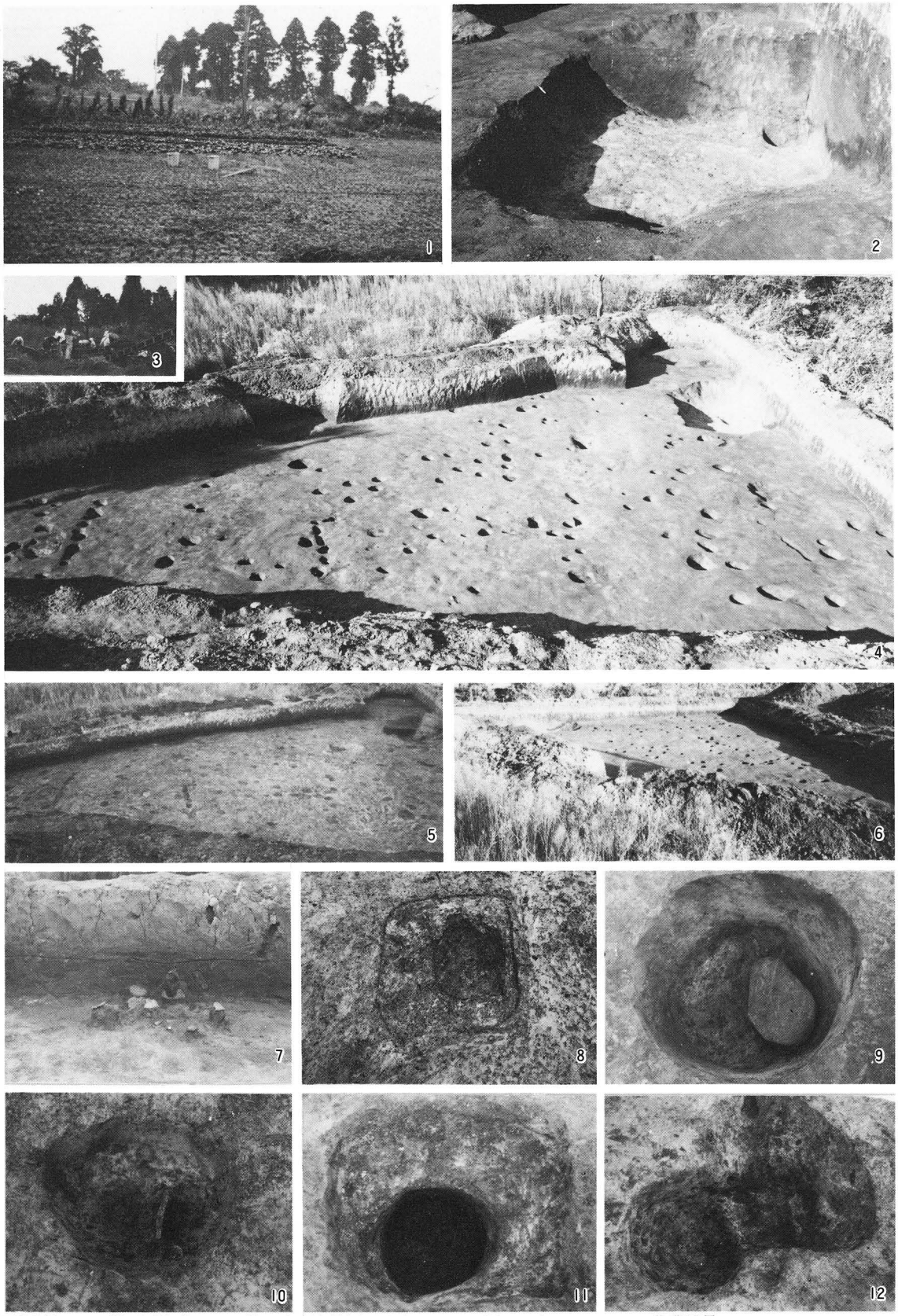
タ　高島忠平・伊藤太作・岡本東三・山中正敏・舟崎久雄1972『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会
高島忠平・橋本正1974「入善町じょうべのま遺跡　第Ⅱ章　遺構」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会

ハ　橋本正・岸本雅敏1975『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』富山県教育委員会
橋本正1968「回転押型文土器の問題　－富山県の場合－」大境第４号

ク　舟崎久雄1974「第Ⅱ章　土器の編年」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会
藤田富士夫1974「富山県立山古窯跡群」考古学ジャーナル97

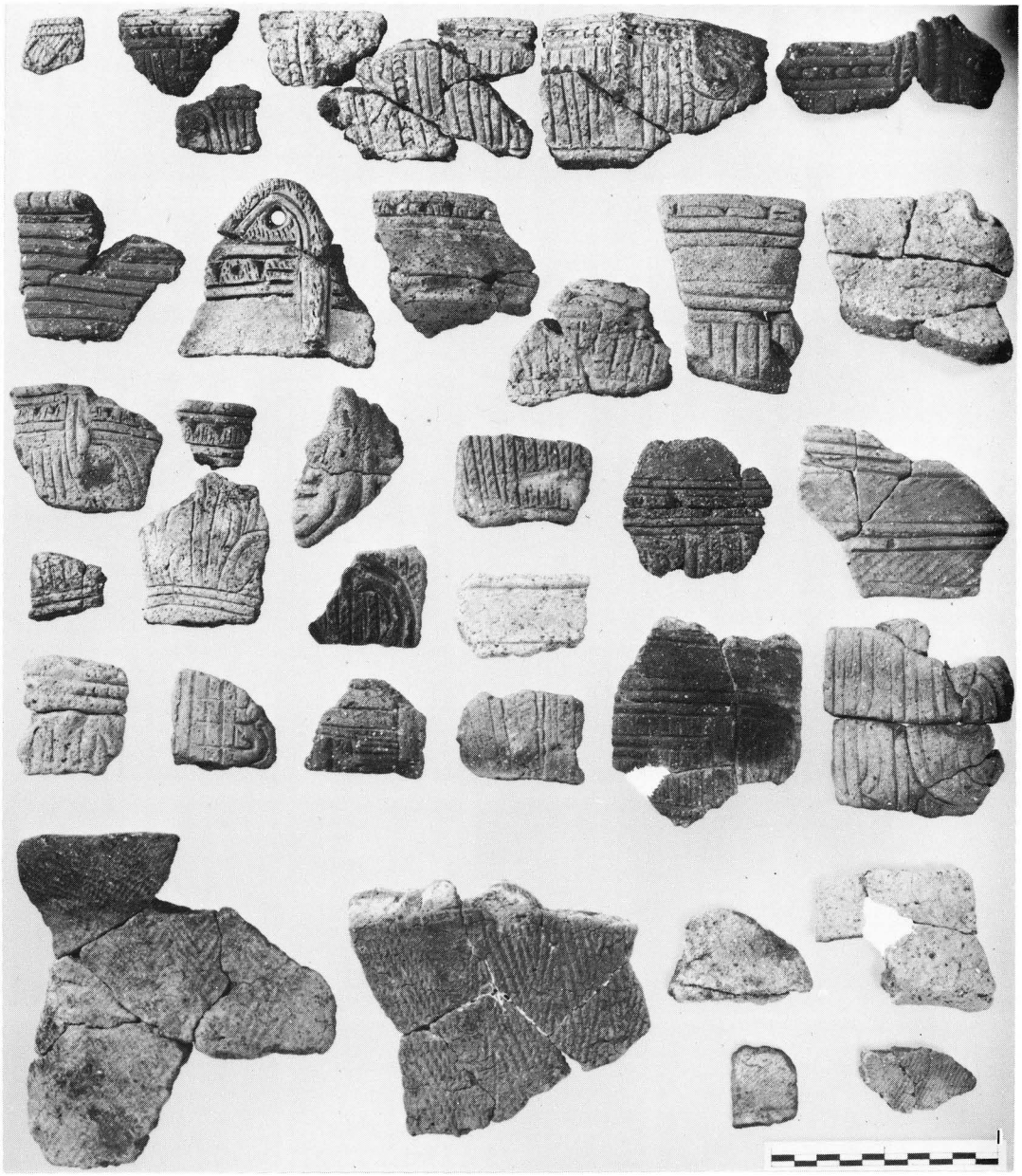
ミ　宮本哲郎1976『浅川第１号窯跡（灰原）調査報告書』石川考古学研究会

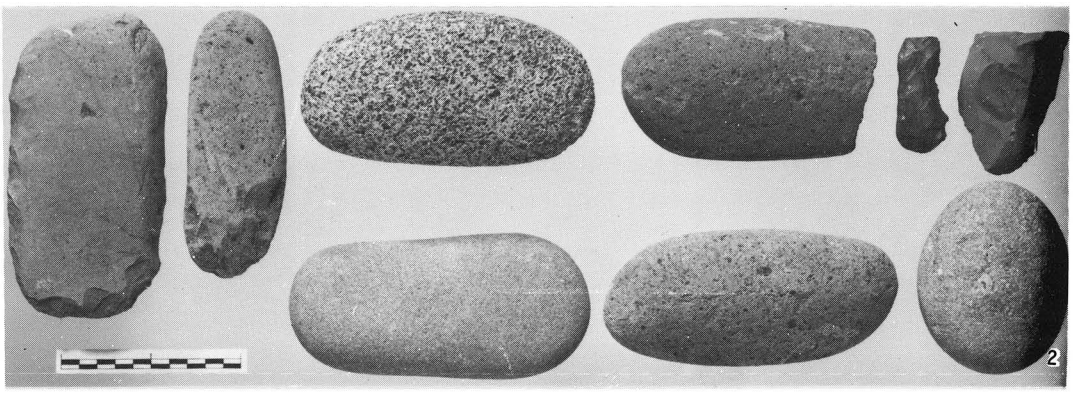
ヨ　吉岡康暢1967「遺物」「土器の編年的考察」『加賀三浦遺跡の研究』　〃



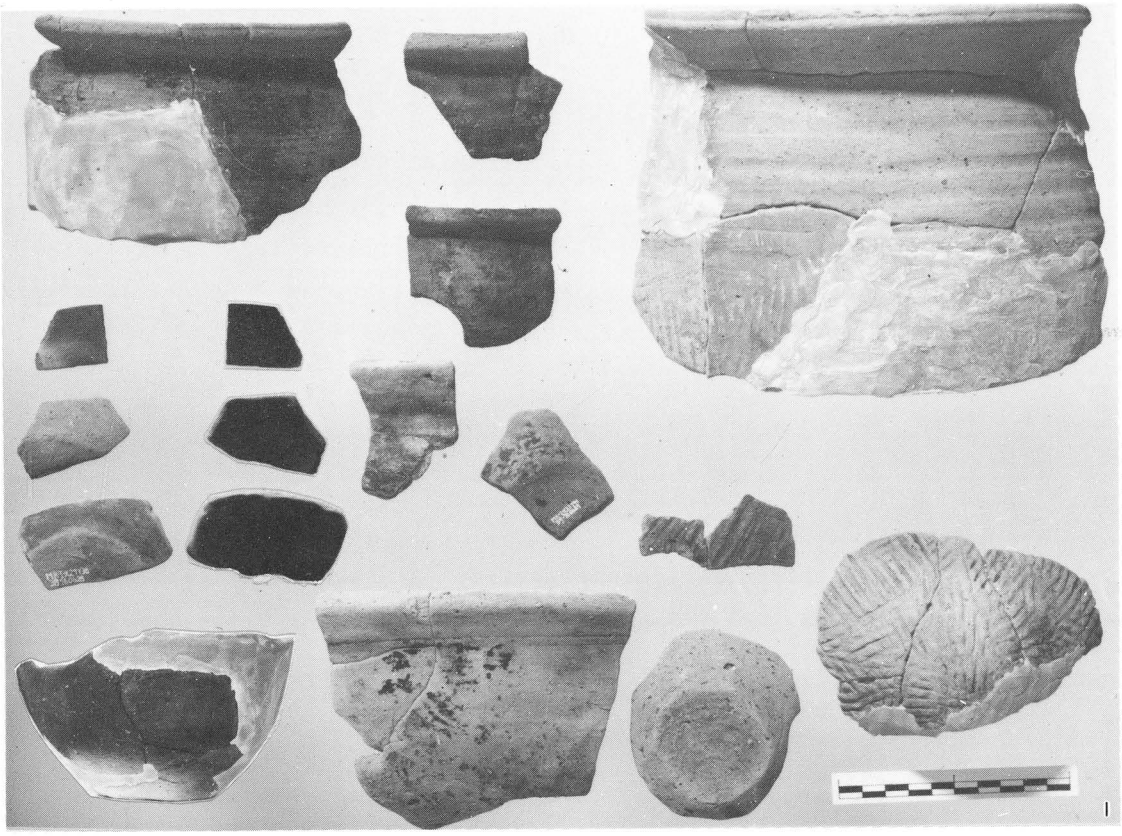
図版第１　第２地点

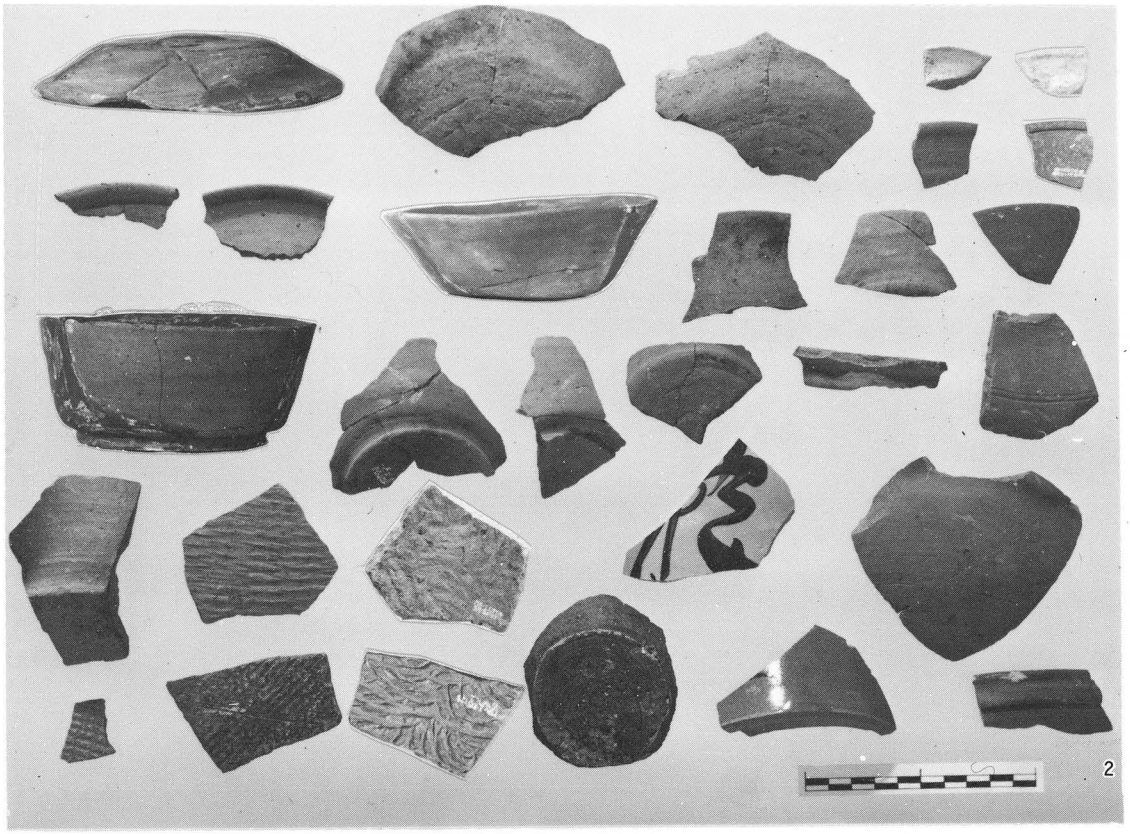
１.第２地点遠景(東より)　２.穴03(南より)　３.作業風景
４.第２地点全景(南より)　５.遺構検出状況(南より)　６.第２地点全景(西より)
７・８．遺物出土状況　９・10.建物01の柱穴　11.穴01(西より)
12.建物01の柱穴他





図版第2　土器・石器　（1，⅓　2，¼）





図版第3　土器　1.約⅓　2.約⅓

富山県砺波市
宮森新北島Ⅰ遺跡
緊急発掘調査概要

発行日　昭和53年３月31日
発行者　富山県教育委員会
編著者　神保孝造・岡上進一
　　橋本正春
印刷者　第一共同印刷株式会社